

第三回

「都会にはないものが、たつぷりとある

湯の町、蓮台寺の宿」

大地の彩 花月亭



「蓮台寺温泉を知っていますか？」

下田の山懷に抱かれたこの温泉町は、その昔から蓮台寺温泉として有名である。弘法大師が発見した修善寺温泉、徳川家御用達となつて一躍有名となつた熱海温泉よりも、実はこの蓮台寺温泉のほうが、歴史は古いのだ。

なんとその始まりは、八世紀、聖武天皇の時代に遡る。奈良の大仏建立の折、寄進を集めた僧、行基が開湯と語り伝えられている。蓮台寺という寺が建てられたのだが、いつしかなくなり、今では地名だけが残った。

伊豆急線の駅もあり、下田市街地からは十分程度の近さだが、「海のリゾート」をイメージさせる下田とは、まったく異なるところが面白い。

「喧騒など、どこにもない町」

伊豆急下田駅から迎えの車に乗り込むと、車は稲生沢川に沿って内陸に向かった。なんでも「下田温泉」の源泉は、すべて蓮台寺にあるとか。目にもまぶしい緑が広がってくる。山はすぐそこにある。かつて河津鉾山があり賑わった町も、今ではシーンとしている。

この夜の宿『花月亭』で旅装をといて、付近の「湯の花小路」を歩く。この道は歩行者専用なので、車が走らないばかりか、まったく人にも合わない。その昔、吉田松陰が隠れたと言われる屋敷が唯一の観光スポットだ。昔の古い建物がポツリポツリと残る中、それにしても静かな町である。



「とにかく、ゆつくりしていただきたいのです……」

散歩から宿に戻る帰り際、喫茶店『馬車道』で展示された古い写真を見る。お茶を飲みつつ、地元の人とおしゃべりすると、やけに盛り上がる。この町には、笑う時間もたっぷりあるようで、少し心が躍った。

宿ではフロントチーフの田村さんが待ってくれていた。東京から越してきて五年になるという。畳敷きの廊下から庭が見られるラウンジに移った。三百坪もある中庭には、種々の木々が植わった小山があり、池では太った合鴨が鳴きながらうろついている。

町も静かだが、宿もまた、静かであった。

ラウンジからは、庭園を囲む数寄屋造りの二階建て家屋と、背後に山

の稜線がくつきり見える。

「こちらでは、とにかくのんびり過ごしていただきたいのです」

田村さんは穏やかな口調でそう語る。

彼女自身が、この町や旅館の安らぎを実感しているような雰囲気だった。

なんでも喘息がちだった娘さんが、こちらに来てからすっかり健康になったという。暮らしのリズムも、かなり変わったにちがいない。

我々も早めに部屋に入って、温泉を楽しむことにした。旅館のよさは昼のよさだ。部屋でゴロゴロしながら、庭や周囲の山を見ているだけで時間が過ぎていく。風呂は源泉らしい、美しいブルーの温泉でかけ流し。部屋に戻って、鳥の鳴き声を聞きつつ、軽く一杯飲んで、昼寝にかぎる。



大正ロマン

田村さん

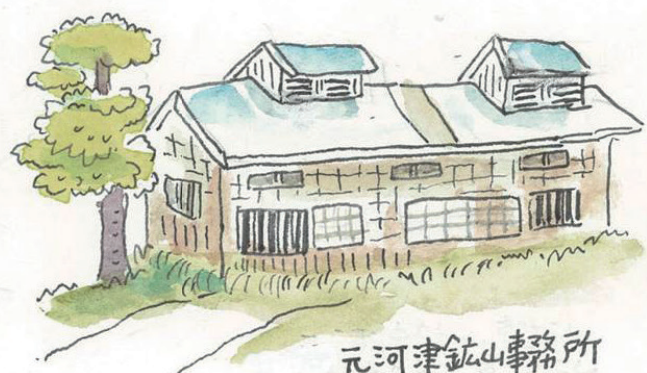
中庭とカモたち



おてだま



源泉



元河津鉦山事務所

「心づくしに、気持ちに通じる」

夕食に向かう廊下を歩いている時に、遅ればせながら、ふと気が付いた。この宿の廊下が畳敷きだったのは、素足で歩くようになっていたからだ。裸足好きの僕としては、こんなにうれしいことはない。

夕食場所は、掘りごたつ形式の個室だ。この夜の献立は「海」。地元産の魚のお造り、アワビやサザエの焼き物は目の前の無煙ロースターで焼く。定番の金目の煮付けやカサゴの丸揚げなども、伊豆ならではの。スタッフを呼ぶ時は、声を出さずに、お手玉を廊下に投げる。

するとすぐに駆けつけてくれるのだ。しかもみんな若いところがいいね。



「たまにはブーツとしてみたい」

飲み忘れたが、到着時、ラウンジには、ミカンジュースとワインのウエルカムドリンクが用意されていた。朝にはコーヒーもある。驚いたのは、大浴場の外に、無料の自販機が置いてあったことである。

朝食もアジの干物など、自分で焼いてお腹いっぱいになり、チェックアウトまで、またもや庭を見ながら部屋でゴロゴロ。体の中に溜った泥がきれいに流されていく。ブーツとするとはいきつと、そういうことなのである。

帰り際、近所の『リリー』というパン屋でクリームパンを買った。クリームがたっぷり入って百円である。なんだかこの町らしかった。